

リチャード・グルノー「現代スポーツ社会学への評注」
—「階級、スポーツおよび社会発展」への15年後のあとがき—（翻訳）

岡田 猛
(2000年10月13日 受理)

Richard Gruneau: "A Postscript, 15 Years Later" to *Class, Sports, and Social Development* (Translation)

OKADA Takeshi

ここに訳出するのは、Richard Gruneau. *Class, Sport, and Social Development*, Human Kinetics, 1999の113~127ページに掲載された、著者による"a postscript, 15 years later"と題するエッセイである。同書は前オリジナル版、Richard Gruneau. *Class, Sport, and Social Development*, The University of Massachusetts Press, 1983を、本文における一切の変更なしに、再出版されたものである。15年が経過して、このような形態での再出版が実現するのは例をあまりみないことであり、同書の価値を再認識させることになった。

筆者達は1983年版を翻訳出版した(岡田・多々納・菊; *スポーツの近代史社会学~階級・スポーツ・社会発展の理論とカナダにおける実証~*, 不昧堂出版, 1998。)が、翻訳出版に際して著者は「原著者ノート」としてエッセイを寄せ、同訳書に翻訳掲載された(213~220ページ)。

今時の"a postscript, 15 years later"は「原著者ノート」を拡大、再編したものであり、前版出版以来の著者、学界における研究の進展をふまえて自著を振り返っている。みられるように、記述は単なる自著のレビューの範囲を超えて、スポーツ社会学、社会学、現代思想を鳥瞰させる展開となっている。

翻訳書の読解の助けともなることを期待してここに訳出するものである。

“歴史は権力の所産である。しかし、権力自体、透明なものであるからそれを分析してもなんにもならない、ということは決してありえない。” Michel-Rolph Trouillot¹⁾

北米社会学は1970年代の大部分を通して、アイデンティティの危機にみまわれていた。一方で、この領域でなされた数多くの研究はみどころ戦後の郊外的生活という主要な組織化仮説を暗黙のうちに受け入れた。多くの社会学者達はまた、社会学は仮説の検証、法則的な演繹的理論の追求と、自然科学の方法をまねるべきだと考えた。他方、こうした主流をなす立場に対する批判も高まった。戦後新世代の批判的社会学者達は主流をなす経験科学よりも哲学、歴史学、ラディカルな社会理論から彼らの着想を得た。社会学はなにに取り組みべきかについての彼らの見解は、資本主義の批判、軍国主義や植民地主義の拒絶、さらにはマイノリティや女性の権利を拡大する闘いに結

びついたものであった。

社会学が揺らいでいたこの時期、スポーツ社会学は依然として好奇の目でみられる学問であり、国をまたがる献身的な専門家グループに支えられた小さいけれども生きのいい下位領域であった。しかし全体としては明らかに社会学の周辺に置かれていた。それでもスポーツの社会学は自己のアイデンティティや方向づけの危機をくぐり抜けつつあった。北米“スポーツ社会学”の初期リーダーの幾人かは体育の出身であり、このことがこの分野での初期の議論や代表的な研究問題のタイプに影響した。体育の影響力が遺したひとつの傾向は広範な社会的争点や問題よりも、自己目的としてのスポーツにより大きな関心を寄せるということであった。スポーツ社会学者がより大きな焦点を当てたのは、社会の継続的生産においてスポーツが果たす役割よりも、社会組織がスポーツへ及ぼす明示的效果、つまりスポーツはいかに社会によって形成されるか、であった。加えて、スポーツの社会学における研究の多くは理論的方法論的枠組みを、権力や支配という論点にも、社会発展に関する広範な争点や問題にも注意を払うことのほとんどない親学問から採用した。

わたしが1970年代末に階級、スポーツおよび社会発展を書き始めた時、これらの争点がわたしの心を強くとらえていた。スポーツの社会学でよく知られた議論の批判と、批判的分析のための新しい理論的基盤の構築を結びつける本を著す仕事をわたしは自己に課した。社会理論上の幾つかの中心的問題にスポーツがいかに関わっているかを示すことがわたしの目的のひとつであった。さらにわたしは、社会理論上の一定の“古典的な”方法や問題の再考察が、社会的文化的な生活でスポーツがもつ特質や意義の変化についてのわれわれの理解をいかに豊かにしうるかを示したかった。考えてみると、このような企てのしからしめることが、西欧社会学の伝統にある多くの傑出した研究を特徴づける、あの批判的広域的な歴史的制度的分析スタイルへの回帰であった。

学生から時々、階級、スポーツおよび社会発展で概説された理論的、方法論的パースペクティブをわたしの近年の研究がなおも指針としているかどうか、聞かれる。本書は1970年代後期、1980年代初期に固有な一連の争点や論争に取り組むために書かれたので、これは難問である。今日では社会分析で取り組まれることを必要とする全く異なった争点や論争があり、それらは明らかに新しい概念や新鮮なパースペクティブを必要とする。同時に本書は、批判的社会分析の目的およびそれを達成する最良の方法についてのわたしの理解を絶えずすすめる幾つかの議論を提起した。この点で際だつのは、社会理論を歴史学、解釈的文化分析、および政治経済学と結びつける、スポーツ研究への批判的アプローチという本書の主張であった。近年のわたしは、例えば政治経済の次元より文化分析的次元に肩入れするというふうにして、これらの分析諸次元のあいだのバランスを少しばかり釣り合いのあるものにしてきた。しかし、歴史と理論、解釈的文化分析および政治経済学がともに用いられるスポーツ研究にたいする広範囲の総合的アプローチへのこだわりは変わることはない。当然のこととして、このような総合的多次元的アプローチは、純粋に物質的な(例えば技術的、経済的)もしくは観念論的(例えば文化的／言語的)決定要素へスポーツ分析を還元する一次的パースペクティブには批判的である。わたしの考えでは、このアプローチが、権力、平等、自由、

社会性およびアイデンティティとスポーツの関係についてのゆきすぎた主意主義的、決定論的解釈にたいする批判と結びついた時、それは一層有力になる。

階級、スポーツおよび社会発展の初めの諸章で、上述したアプローチに関する理論的基礎を展開し、スポーツの社会学における主意主義、還元主義および二元論的思考を批判しておいた。こうして社会におけるスポーツの分析を導くオルタナティブな概念、議論の領域——修正主義的理論枠組み——に取り込む舞台が整った。この理論枠組みはだいたいにおいてひとつの要となる主張に基づいていた。すなわち、プレイ、ゲームおよびスポーツの活動は示差的な社会的実践の領域としてよく研究されうる。その実践を定義する構造は、人間的行為主体が用いる権力の範囲に限定を課し、圧力をかけるより広い社会構造のなかで、さらに社会構造を通して構成される、という主張である。さらにわたしは主張した。プレイ、ゲームおよびスポーツを社会的可能性、示差的な実践領域として構成する構造は、社会的行為の媒介でもあり結果でもあるとみなされるべきである。この構造はまた権能付与的（諸種の自由、喜び、規律の習熟形式、社会的紐帯およびアイデンティティへ通路を開く）でもあり、拘束的（構造に関連する実践や意味を支配関係をささえている社会的文化的形式へ方向づける）でもあるとみなされうる。

本書での社会的実践、“構造化される”という主体の人間行為の特質、および社会構造の権能付与的、拘束的特性への同様の強調は多方面からの影響を受けていた。当時のわたしの考えはしかしながら、“構造の二重性”や社会的“構造化”のダイナミックスというアンソニー・ギデンズ Anthony Giddens の研究に負うところが顕著であった²⁾。わたしが本書の序章で自由と拘束のあいだのパラドックスの形式という“問題”を中核に据えようと決心したのも、ステイヴン・ルークス Steven Lukes が発展させた同様の幾つかの着想とともに³⁾、権力、主体的行為および構造に関するギデンズの理論的考察からヒントをえたからであった。わたしはまた、構造の機能的、体系的再生産よりも、構造の動的で継続的な生産を強調する点でもギデンズの研究に惹かれた。この点の強調によって、社会学的分析での多くの秀逸な研究とギデンズのパースペクティブが共有する特徴、つまり歴史は社会理論の有機的部分であるということ、がつかまれた。しかしさらに重要なことは、歴史が一連の継続的な構成的過程であるとみなされなければならないことを強調すれば、支配的な社会構造が決して不変ではないという事実が理解できるということである。支配的集団というものは、自分たちの特権をささえる社会構造を再生産しようとしてその権力を行使する。しかしながら、それがいかに、またどのあいだ成功するかは常に未定である。

それでもなお、ギデンズの構造化理論がそれだけで必ず、スポーツ社会学の研究にたいして十分な基盤を提供していると確信していたのではない。ギデンズは確かに社会構造が限定を課す際の条件を認識していた。しかしながら、激しい抵抗や闘争に直面してもなお支配的社会構造が実際に存続し、さらに再生産される時、社会の構成におけるそれらの諸契機について、構造化理論は十分に詳述していなかった。同時にギデンズの研究は、彼がゴッフマン Goffman の演劇論的社会学に関心をもっていたにもかかわらず⁴⁾、社会的実践の言説的——“テキスト的”——特性を分析すると

いう方向付けに十分ではなかった。これらの明らかな限界を越えようとしてわたしは、“インフォーマルな” 集団における“世俗的な” 自己肯定の形式を介した階級構造の再生産に関するポール・ウィリス Poul Willis の幾つかのアイデアを、本書の理論的な枠組みに取り入れた。それらのアイデアは、文化を“実践”かつ“ヘゲモニー”とするレイモンド・ウィリアムズ Raymond Williams の議論と同様、より広い理論的文脈をもつギデンズの研究でも設定されていた⁵⁾。わたしはまた“文化的テキスト”に関するクリフォード・ギアーツ Clifford Geertz の先駆的研究から幾つかのアイデアを借りた。最終的にはしかしながら、テキストの意味づけがどのように権力や不平等、社会的再生産に関係しているかについてギアーツの研究はほとんどなにも語っていないという結論にわたしは達した⁶⁾。論理的にみて、解釈的文化分析のもつ洞察力と社会理論、政治経済学の洞察力を間違いなく包み込む理論的枠組みを發展させれば、これらの問題は避けられようと思われた。この方向でわたしは考えをすすめたので、階級、スポーツおよび社会発展での実践、構造、権力についての議論は、マルクス本人よりも、グラムシ的な文化研究アプローチや1970年代のカナダ政治経済学による影響を多く受けたそれではあったけれども、マルクス主義を指向したものとなった⁷⁾。

こうしたことがすべてあわさって、本書では権力の身体的諸次元および、スポーツにおける、スポーツを通じた社会的再生産を無視した理論的枠組みにならざるをえないという不幸な結果になった。わたしは1970年代末にピエール・ブルデュー Pierre Bourdieu を読んでいたし、彼の研究の中心にある身体的実践と権力表象のあいだの関係も知っていて、こうした欠落が生じたのは、振り返ってみて特にいぶかしく思われる。本書の分析をすすめれば、ブルデューの実践理論の必要性に関する、および示差的な実践諸“領域”を区分けする境界の社会的な生産と再生産に関する多くのアイデアがいかされているのは明瞭である⁸⁾。しかしギデンズの考えに惹かれていたわたしは、政治闘争における観念の形成的な役割へのグラムシ的関心の強さともかかわって、社会の構成に関して無意識的な身体的実践よりも、意識的な主体的行為に焦点を当てることになった。スポーツにおける無意識的な身体的実践、より広くは身体化という争点への不注意が高じたのは、身体へ大きな関心を示したことが決してなかった知的伝統、マルクス主義的な史的唯物論の方法にわたしが惹かれていたためである。後年ブルデューやミシェル・フーコー Michel Foucault を読んでわたしは、社会的実践、社会的構造もしくは権力についてのなんらかの適切な理論を用いて、意識的な主体的行為および意識されることがほとんどない身体的な規律や身体化がともに考察される必要があることを得心した⁹⁾。

長年にわたって評者達は、階級、スポーツおよび社会発展はマルクス主義的著作であると示唆したことが幾度かあった。この言い分は、分析にみられるヴェブレン Veblen, C. ライト・ミルズ C. Wright Mills およびギデンズといった非マルクス主義的著作家たちの影響力の大きさからして、異論がなくはない。しかし、本書が明らかに [以下の点で] 西欧マルクス主義に負っている点が幾つかある。1) スポーツを一連の社会的実践とみなす弁証法、唯物論寄りのアプローチに重きをお

いたうえでの、スポーツについての一次元的な“観念論的”“唯物論的”パースペクティブにたいする批判、2) 社会でのスポーツの構成において鍵となる配分的表出的な規則や資源の決定において階級構造に与えた特権的役割、3) カナダスポーツの制度化におけるポスト植民地主義的な階級闘争や資本主義的階級支配の強調、および、4) 資本主義的階級構造に関わる拘束を無視したまま、“自由”を自己創造の機会とする暗黙裡の定義。

本書が初めて出版されて以降、西欧資本主義は世界中で社会的文化的な生活への浸透を強めてきた。特にスポーツは、1980年代初期のわたしの予想をはるかにしのぐペースでグローバル化する商品論理に巻き込まれてきた。わたしは本書で、カナダスポーツの制度的構造化における“支配的契機”は諸種の階級的、非階級的の行為主体を巻き込んだ一連の複雑な交渉や闘争を介して展開する、と主張した。しかしこれらの交渉や闘争が起った領域は資本主義的な中核-周縁関係、ポスト植民地主義的な国家形成および不均等なカナダの産業発展といった場面であった。スポーツ的实践分野の支配的構造を形成する規則や資源を提供するのは資本だけである、というのは言い過ぎであったとしても、資本主義的階級構造および容赦ない商品化の拡大は非常に重要であった。今日それらは一層重要になっており、西欧諸国においてだけ存在するのではない。こんなわけでジャック・デリダ Jacques Derrida の最近の用語を使えば“マルクスの妖怪”は引退を拒んでいる¹⁰⁾。資本主義的労働過程、階級構造、国家政策および、空間時間の社会的組織化におよぼす資本主義的影響力を批判的に分析することが未だ課題であり、今日スポーツに関する如才無いネオマルクス主義的パースペクティブを発展させるという課題がこれまでよりも一層緊要になっていると思えるのも、以上の理由からである。つまり、スポーツの社会学において批判的にみられる必要のある重要な支配形式が、階級、国家および労働過程のほかにも厳存するのである。現代資本主義の特質にはまた重要な変化があったのであり、このため、資本主義的分業や蓄積過程においてコミュニケーション、文化の重要性が増加し、人間生活での空間時間の社会的組織化が変化した点を特に勘案した、新しい概念やパースペクティブが必要とされている。

わたしは階級、スポーツおよび社会発展を完成してほどなく、現代スポーツの形成においてメディアのもつ役割についての記述が本書では不十分であることを悟った。わたしはバリ島の闘鶏のもつテキスト的特性に関するギアーツの分析に注意を払ったがそれでも、スポーツのもつ表意作用的、解釈的次元についての十分な分析も本書にはなかった。このような限界を認めたので、1980年代の残された期間の多くをわたしはスポーツとコミュニケーション・メディアの研究に駆り立てられた¹¹⁾。この期間、社会におけるスポーツの社会的生産および、資本主義的生産というより広いダイナミクスの両者をわたしが理解するうえで文化とコミュニケーションの分析はなお一層中心的役割を演ずるようになった。並行して、メディア生産やメディア言説のイデオロギー的次元についてと同様に、自己同一化にかかわる意味の多様性や資本主義的生活における商品の消費についてわたしはより詳しく理解しようと努めた。わたしはまた、社会生活における時間および空間の諸側面の変化、すべての社会的文化的関係が順調に空間を広がってゆく様式および、資本主義的近代性のか

くも重要な特性となっている時間-空間の圧縮について一層認識するようになった¹²⁾。

グローバルな資本主義は危機的で過渡的時期を経つつあったのだが、階級、スポーツおよび社会発展を書いている時のわたしはそれにぼんやりとしか気づいていなかった。戦後の長い経済の好景気は北米やヨーロッパでの豊かな消費社会の発展を支え、1973-75年のグローバルなデフレーションに終止符をうった。こうして経済を再構築する新自由主義的経済政策はその舞台が整い、1980年代、1990年代を通して西欧の経済や政治を支配するようになった。この再構築を通して情報、メディアおよび娯楽産業が世界中で目だって重要な生活特性になった。通信衛星、デジタル情報技術、規制緩和された市場はいずれも、情報交換、シンボル生産といった成長産業がさまざまな社会の内部さらに社会相互間にわたって空間的に拡大するのを助長した。これらの変動は次に資本主義的分業の新たなグローバル的再組織化の重要な部分になった。こうして世界の何箇所かで多国間の“自由貿易”協定が強化され、北側諸国での集中的な製造、工業労働が脇においやられ、資本の無慈悲な圧力による生産やマーケティングでの“フレキシビリティ”や注文製造が促進された¹³⁾。こうした文脈において、資本にとってスポーツのもつ経済的文化的重要性は著しく増加した。一実践領域としてのスポーツの輪郭は、グローバルなメディア巨大複合企業、国境を超えた商業システム、国際的観光事業、都市の再開発に一層統合されることによって再加工され再定義された。この文脈における自由と拘束、解放と支配の様々な形式とスポーツの関係を分析する際は、スポーツ的实践を条件づける新しい構造や意味、闘争に配慮する必要がある。

これらの新しい闘争の多くは、階級や国家政策といった領域からは遠く隔たったとしばしば思われる領域における権力、アイデンティティおよび平等という問題をめぐるものである。1970年代以降、社会的、文化的な分化、多様化がすすみ、グローバルなネットワークや文化の流れおよび社会関係における異質化がすすんだ。それにともない、ヨーロッパや北米では古い産業労働力の分散が強まってきた。こうしたことにより、戦前戦後の既成の文化的“アイデンティティ”形式の多く（例えば階級、ジェンダー、人種、国家および性的選好にそれらは結びついていた）が、世界のあちこちで、西欧では特に、揺らぎ始め、新しい交渉形式に取って代わられてきた¹⁴⁾。現代のメディアや娯楽の産業がそれらの交渉サイトとして一層重要になってきた。この文脈でスポーツは、多様で矛盾することもある社会的アイデンティティ形成の形式が展開されるサイトとして、これまでよりも一層重要になってきた。ここでいうアイデンティティ形成は、国家や都市ばかりでなく、人種、ジェンダーおよび、一連の目立った消費財やライフスタイルに関わる¹⁵⁾。

階級、スポーツおよび社会発展では地位弁別に関する権力や闘争、カナダの国民大衆の闘争、テクノクラットのイデオロギー、国家介入のもつ非階級的次元について議論された。さらに目を引くことに本書は、階級に基礎をおいたより伝統的な敵対形式と、諸種の非階級的闘争に関わるより新しい社会運動のあいだでの協同の構築の呼びかけで終わっている。しかしながら本書でこの上なく強調されたのは特有な方法によるスポーツの“構造化”およびスポーツによく与えられる意味づけにおける階級闘争、階級的アイデンティティ、および階級的差異であった。こうした階級ダイナミ

クスが主として強調されたために、他の、例えば人種やジェンダーに関した、大変重要な構造的実践——他の規則や資源のセット——についての分析は犠牲にされた。この限界は本書が初めて出版されたときもかなり重大であったが、古くなった階級政治や階級闘争の場や形式の多くが、広大な文化的政治的異質性に溶け込んでしまったように思える今日では一層際だった限界になっている。

この文化的政治的異質性を認識し分析することはスポーツの社会学においてかなり重要な問題であるのは疑いない。それ故、世界中で権力や差異の多様な資源といかにスポーツが交差しているかという究明に近年非常に多くの研究があげられているの知っても驚くことはない。ノルベルト・エリアス Norbert Elias の“フィギュレーション”社会学¹⁶⁾の影響をうけた興味ある分析方向が強調するのは、権力中心や権力バランスのもつ多様で多方向的な特性である。それらはモノや表象、アイデンティティの国際的流れを枠づける要素である。例えば世界中での複雑で長期にわたる経済的、社会的、政治的、文化的な相互依存の過程は現代生活における文化的な形式や実践のタイプやスタイル、意味における差異を減少させてきたが、フィギュレーション社会学はその過程にわれわれの注意を向けてきた、とジョー・マグァイアー Joe Maguire は主張した。しかし単一の原因、単一の権力中心が現代社会の発展コースを全面的に決定してきたのではない。特に権力の場合、過去数世紀におよぶ形式的に不平等な集団間における複雑さを増す相互結合、相互依存の発展は、特権的な中核集団と外部集団のあいだの多くの区別を曖昧にする社会的文化的相互作用形態をもたらした。この過程は新しい区別形式の創造を促すが、それはまた権力比率を等しくし、新しい行為スタイル、新しいアイデンティティ形式を創り出してきた。スポーツの場合でもこれらの過程は貫通した。矛盾したことともいえるが、そこではグローバルな規模でのスポーツのタイプやスタイル、意味における差異の減少（例えば国際組織、グローバルスタンダードのルール、多国間の新スーパー・リーグ、等々の形成）に並行して、スポーツ実施上の活動やスタイルおよび意味の多様性が増した¹⁷⁾。

“フィギュレーション的な”分析方向は、ギデンズの研究と同様、二元論的思考という問題を経験にかけ、構造以上に過程を強調するという長所をもっている。フィギュレーション的パースペクティブによればまた、“モダン”スポーツの社会的文化的特徴が何なのかを考えざるをえないし、うまくいけば、そうすることで多元的、文化横断的そして実にグローバルな観点でスポーツにおける権力や差異という問題を考えないわけにはいなくなる。わたしがフィギュレーション的パースペクティブと最初に出会ったのは間接的であり、1970年代にエリック・ダニング Eric Dunning の研究を読んでいたときである。ダニングは25年以上にわたってスポーツ社会学へのフィギュレーション的アプローチの疲れを知らぬ推進者であり、彼の論文や英国におけるラグビーの社会的発展に関する（ケネス・シャド Kenneth Sheard との）著書はわたしの考えに大きな影響を及ぼした¹⁸⁾。それらの多くの影響は階級、スポーツおよび社会発展の歴史的分析に明らかである。しかしながらダニングの研究——その限りではエリアスの研究もまた——が適切な権力理論や確固とした社会的批判の視座を提供しているとはわたしには思われなかった。エリアスとダニングの研究で権力は多様に論じられているものの、社会生活における支配に関する広大な理論や批判に権力が直接結びつけら

れることは滅多にない。資本主義の社会的組織化の変動に関しては特にそうである。15年にわたる理論的な発展や精錬がすすんだ今日でさえ、マグアイアのアプローチのような、スポーツ社会学へのより最近のフィギュレイション的アプローチは、グローバルな資本主義に特有な構造的ダイナミクスにはちらっと注意を払うだけである。権力研究へのフィギュレイション的アプローチでは若干自制性、無意図性が過ぎるのが常で、学問的距離化という想像上のスタンスを取って破るということはないように思える。これはわたし個人にとってもっと重要なことである。こうして、潜在的に多様性を受け入れ、批判的刃を欠いた権力研究へのアプローチが結果することになる。

近年のスポーツ、権力および差異の研究におけるより啓発的な分析方向は一層自己意識的に、その焦点を種々の支配形式の批判においてきた。この分析方向はラディカル・フェミニズムやポスト植民地主義理論、ポスト・モダン理論の各種分派、カルチュラル・スタディおよび、性的選好、環境保護、障害をめぐる闘いに結びついた新しい社会運動から鼓舞されてきた。この出自の多様性は、スポーツと権力の研究に使用されるアプローチが非常に多様であることがしばしばである、ということに反映されている。しかしながら、単純化しすぎとのそしりを覚悟していえば、ミシェル・フーコーの研究が明示的、黙示的に、示唆にとむことの大変大きい近年の多くの批判的研究に理論的刺激を多く与えてきた、とわたしは考える¹⁹⁾。

フーコーの主張によれば、権力は社会の生産にかかわる不可避的部分である。権力は遍在しており、すべての言説（批判的言説さえも）、知的身体的規律、社会関係を介して浸透し、どれか単一の社会的基盤に依存してはいない。上述した一連の批判的視座から著述し、しばしばフーコーから借りてきたアイデアをたよりにする研究者達は、わたしのような古い世代の社会批判家達にラディカルな政治学についての理解を拡大するようにと迫る。批判的分析のこの新しい方向はまた、“拘束”に関して、他のそれ以上にひとつの権力軸、ひとつの政治的主体性に優先権を与える議論はいずれも問題性をもつということに注意を集中してきた。同時に、総じて言えば、権力と差異についての新しい批判理論は、スポーツにおいて、もしくはスポーツを通して、なんらかの“普遍的な”開放や自由を達成するという可能性に異議を唱えている。上述されたより新しい批判的アプローチは、階級、スポーツおよび社会発展で展開された分析にてらして注釈を付してしかるべき幾つかの争点を扱っている。第一に、現代の批判的思想における権力と言説のあいだの関係をフーコー学派は強調するが、このことは本書で使った一定のカテゴリーや議論の限界についてのわたしの理解を深めるのに役立った。よい例が、スポーツの社会学を再活性化するための視座として本書が“古典的”社会学を称揚したことである。C. ライト・ミルズの刺激をうけたわたしは、“古典的”社会学のアイデアを進歩的なやりかたで使用しようとした。それは、歴史社会学への批判的、総合的、多次元的アプローチや制度的分析を促し、産業資本主義において権力と不平等の特質が変化することにかかわる重要な研究課題を確認するためである。しかしながら、概念にかかわる隠れた仮説のためにわたしが古典的 sociology のアイデアを“進歩的に”利用することが十分できなかったもので、この企図は部分的な成功をみただけであった。

ロバート・CONNELL Robert Connell は社会学における古典的理論のアイデアはこの学問の発展に関する選択性の高い“創設ストーリー”から出てきたということを説得的に主張してきた。このストーリーでは、社会学の分野は“ヨーロッパ社会の内的変動”にたいする反応として出現したといわれている。この変動に促されて“才能豊かな小集団の著作家達による学問定義的な教科書”がつくられた²⁰⁾。話しを進めてもう少し詳述すれば、斯学の“創設者達”を動機づけたのは、近代産業社会の出現を体系的に、すなわち産業革命、階級闘争、世俗化、疎外、近代国家という観点から、分析しようという欲求であった²¹⁾。CONNELLによれば問題は、このストーリーが完全ではないということである。それは19世紀、20世紀初期の社会学がいかに百科全書の範囲をもち、進化、帝国、文明化、進歩というグローバルな争点に関心をよせ、非ヨーロッパ的な文化や社会を取り扱っていたかを見落としている。これらの争点に関連して必ず社会学者達は、セクシャリティ、人種のジェンダー的差異についての問題や論争にかなりの注意を払った。CONNELLは、それらの強調点は19世紀末期、20世紀初期の社会学において“中核的”関心事であったとの主張さえなしている。

この種の批判は医学、経済学を権力関係に結びつけた“言説構成体”と描き出すフーコーを思い出させる。社会学の場合、当学問が“近代帝国主義の高潮期に、主要な帝国権力の都市的文化的中心地”で形成されたことにCONNELLは留意している。19世紀末期、20世紀初期の社会学者達は、グローバルな差異や闘争という新しい経験に直面し、さまざまな研究によってそれらを説明、正当化するか、そうでなければ疑問視した。しかしながら、グローバル社会学のヘゲモニー的中心地として合衆国が興隆するにつれて、社会学の“中核的”問題について新しい定義が現れ始めた。社会学的な理論や調査の中心の問題は、近代的産業“中心地”の内部における社会的分化、社会的無秩序、社会的発展の研究としてより狭く理解されるようになった²²⁾。このことは、19世紀の社会学にあったあからさまな人種差別主義、性差別主義の多くを当学問の理論的中核から追放するという望ましい結果をもたらした。それはまた、グローバルな差異、帝国、文明化、帝国主義、人種、ジェンダーおよびセクシュアリティについての言説を理論的検討の縁に追いやるという望ましくない結果ももたらした。

わたしの考えでは、CONNELLは20世紀の社会学におけるこの新しく起こってきた傾向をめぐって実際以上に一致点を拡大している。しかしながら彼の議論は、階級、スポーツおよび社会発展でのわたしの“古典的”社会学の称揚が人種的、ジェンダー的抑圧と同様、ヨーロッパや北米を超えたグローバルな中核-周縁関係をほとんど議論させなくした理由を説明するのに役立つ。主として社会階級との関係で定義された産業資本主義の発展における、主体的行為、自由、拘束に関わる一連のより固有の“古典的”な社会学的問題と、示差的な分析スタイルとしての“古典的”社会学についての見解をわたしが結びつけた瞬間、さいは投げられた。産業資本主義と結びついて生起する“内部的な”社会的ダイナミクスや社会的闘争へのこのような焦点づけは進歩的意図をもってなされた。しかしそれにもかかわらずその焦点づけはCONNELLが記述した、社会学史の正典とされる創設ストーリーに内在するヨーロッパ中心的、男性中心的仮説の多くを再生産した。

社会構造の権能付与的、拘束的特性という文脈で考察される構成的な社会的実践の領域としてスポーツを研究することが有益であった——現在も有益であり続けている——とわたしは確信している。しかしこうした研究を遂行する方法の指針を“古典的”社会学に求める必要はない。それに代わって必要なことは、コンネルの研究がわれわれに思い出させるように、理論を研究するよりよい歴史学やより包括的な方法である²³⁾。世代や社会が異なれば——しばしば選ばれた理由が異なれば——理論を研究する正確な方法についての大きな一致がラディカルな知識人のあいだに存在してこなかったのは驚くべきことではない。これらの“差異”は他のどの分野とも同様にスポーツの社会学においても明らかに存在し、多くの刺激的な問題を提起している。

例えば、階級、スポーツおよび社会発展のもつ限界は疑いなく、スポーツの制度的発展において階級構造、階級闘争、国家権力の役割をほとんど単一的に強調したことである。しかしながらこの単一性の問題は、よくマルクス主義的、社会主義的パースペクティブに固有の問題とされるが、同様に過去20年にわたるスポーツにおける女性に関するフェミニズム的著述の多くにも明らかに存在してきた。スポーツ社会学におけるフェミニスト理論家達がつい最近まで、ジェンダー、人種、階級、国家のあいだのつながりにリップ・サービス以上のものを与えることはあまりなかった²⁴⁾。スポーツに関するフェミニズム的著述はグローバルな差異という広範な問題に大きな注意をはらったことはなかった。特に1970年代、1980年代を通して、スポーツに関する北米の主流のフェミニズム的著述は、特に“第三世界”や“南側”諸国からの声を通して明らかになったような、フェミニズム的多様性に言及することはほとんどなかった。

スポーツと人種に関する多くの文献のもつ一次元性についても幾分か同様な議論をすることができ。1990年代の初めまでは人種、階級、ジェンダーのあいだの交差を確かな方法で探求する著作家はこの領域ではほとんどいなかった。加えて人種とスポーツに関するグローバルなパースペクティブは概して発展させられずじまいであった。1970年代、1980年代には、南アフリカのアパルトヘイトに反対する闘争を支持したスポーツ・ボイコットと関連して、人種とスポーツに関する幾つかの著述には重要な国際主義的傾向があった。より近いところでは“グローバリゼーション”に関する研究の刺激をうけてスポーツと人種に関する国際的パースペクティブへの関心が再興してきたようである²⁵⁾。近年ではまた、特にスポーツ歴史学者のあいだで、人種的なナショナリズムや帝国主義の歴史におけるスポーツの位置への関心が高まってきている²⁶⁾。人種とスポーツに関する批判的な社会学的文献での支配的なテーマはそれでもなお引き続き、北米やヨーロッパ社会の“メトロポール”内部での争点や闘争によって過分に決定されている。わたしの最近の講義のひとつ——学生の60%以上がパンジャブ、インド、フィリピン、中国および韓国をバックグラウンドとする——において、“人種とスポーツ”という題目で書かれた学期末レポートのいずれもが現代のアフリカ系アメリカ人の経験を取り扱っていた²⁷⁾。

もちろん過去20年にわたって活動家や学者達が人種を合衆国スポーツの中心的“構造化”特性として認めてきたことは特に重要であった。理論的包括性という視座からは、この文献で数多くのア

フリカ系アメリカ人の声に耳を傾けることが一層重要であった。グローバルな尺度ではしかしながら、考慮のそとに置かれ続けてきた声があまにも多い。ナイキとの契約で下請けをしているアジアの労働者達の声も明らかになればマイケル・ジョーダン Michael Jordan についてのわれわれの理解を大いに深めることができる。合衆国でなされてきた人種とスポーツに関する夥しい批判的な研究が、他の場所での非常に多くの理論的検討事項を型どってきたという事実により、準帝國的な皮肉が確かにある。

こうしてみるとある意味では、スポーツの社会学でよりよい歴史学やより包括的な理論を築くためには、グローバルな規模での権力、不平等、アイデンティティといった多様な軸のもつ多元構成的特性を解明する必要がある。つまり、あらゆる抑圧経験や対抗地点を認め分析する必要、可能な限りあらゆる周縁の声に耳を傾ける必要、である。しかし別の意味では、いずれかひとつの理論的歴史的語り^{ナラティブ}においてこの目的を全面的に実現することが不可能なのは明白である。単一の語り^{ナラティブ}で抑圧、アイデンティティ、政治的アスピレーションの全ての形態を解明することは不可能である。社会的分化の形式が一層断片化し、世界中で数限りないほどの自己定義的な政治的アイデンティティを創造してきている今日では、このことはかつてよりさらに明白である。フェミニズムの場合を考えてみよう。マルクス主義と同様、多年にわたってフェミニズムがもってきた強みのひとつは、精力的な理論的論争を伴う運動の内部での意味ある差異の存在であった。しかしながら過去20年の経過で“単一フェミニズム”はほとんど数えることができないほどの目録からなり対立することもよくある“複数フェミニズム”に変容してきた。この点に関してマニエル・カステルズ Manuel Castells は“女性自身が運動に参加している自己定義的アイデンティティの無数の可能性”からほんの数例を挙げている。黒人・フェミニズム、メキシコ系アメリカ人・フェミニズム、黒人レスビアン・フェミニズム、レスビアン・フェミニズム、サド・マゾ的レスビアン・フェミニズム、日本人・フェミニズム、または“英国のサウスオール Southall 黒人姉妹”のような“地域的、民族的自己定義”²⁸⁾。これらのすべてのフェミニズムの例では、“アイデンティティ”の要求は主体的な政治的行為の運動であり、権力付与形式^{エンパワーメント}であった。

そのような権力付与の追求によって、ジェンダー化された“他者性”をめぐる広範なマイクロ政治的闘争が重要であることにわれわれは一層気づくようになった。ここでの闘争にはセクシュアリティ、家内労働および家内労働者、医療、ハウジング、——スポーツ社会学者にとって最も関わりのある——ポピュラー文化などの事柄が含まれる。これらの事物に関する知れ渡ったフーコー的パースペクティブからすると、これらの事物のいずれをも評価できるひとつの固定的視座というものは存在しない。真実がなく権力だけがあり、権力がそこかしこに浸透しているといわれる世界では、政治が理解されるのは進行中の局地的な戦術的企図としてだけである。ある支配形式はどれも他のどれかの支配形式に関連しており、それ故政治闘争をひとの自己定義的アイデンティティと密接に関わる選択場裡と同様にみなしてさしつかえない。

多様性や柔軟性が制度化され、そのためにラディカルな批判家にたいして真に柔軟であること、

権力の編成や中枢の変動の激しさに反応し続けること、種々の権力闘争において多様な同盟の可能性を新しくつくること、を必要とさせる社会では、このアプローチに有意な強みがある。しかし同時にこのアプローチは幾つかの無視できない限界を抱えている。例えばナンシー・フレイザー Nancy Fraser の示唆するところによると、社会的批判へのこの種の広範なフーコーのアプローチの抱えるひとつの際だった問題は、フーコーの、“すべての多様な闘争がいかにして調整されるか、それらの闘争がどんな種類の変動をもたらすのか、の考察へのためらい”，同様に、彼の“規範的なプログラム化された問題への極端な消極性”にある²⁹⁾。ある権力形態が他より有害である、または、一層ゆきわたっているかどうか、それはどんな時かを評価したり、異なった政治的諸議題が互いに矛盾するようになる条件を評価するために、なんらかの規範的基準がなかったなら、社会批判はその鋭さをほとんど失ってしまいかねない。ビアンカ・ベッカリ Biannca Beccalli の示唆してきたところによると、このような文脈ではラディカリズムは広範な集合的闘争という考えとの接点をたやすく失い、“ライフスタイル政治学の単なるもうひとつの形態”に矮小化される³⁰⁾。

わたしは強く主張したいのだが、よりよい歴史やより包括的な理論を書こうという挑戦は、ゆきわたったラディカルな多元論を単に称揚するだけではかなえられないであろう。われわれに確実に必要とされるのは、社会的分化、異質性、多様性にたいする変わることのない感受性や注目、同様に、さまざまな特権形態やそれらが理論や調査にどんな影響を及ぼすかについての自己意識的反省性である。しかし最終的にはわれわれはまた、それらの事柄——及びそれらに関わる政治——をナンシー・フレイザーが“政治的实践を方向づけるために必要な大診断像”と呼んだものの文脈で評価しなければならない。社会学的理論の課題、可能性は常にそれらの大診断像を描くのに役だってきた。それらの像のおかげでわれわれは、一定の権力形態が制度に沈澱するようになるのはどうしてかを理解することができる。われわれはどの権力形態が広範囲で多様な制度的部門を横断し“全体化”されてきたか（およびどの権力形態がそうではなかったか）、さらにこのことが社会でどんな反応を呼び起こしたか、を評価することができる。またわれわれは、根本的利害が重要な点で頻繁に対立し、最も堅固な支配形態を穿つために時に連携し、皮肉にも支配的な社会的構造や社会的実践を再生産してしまうという点でときに矛盾する、のはどうしてかを評価することができる。

以上を首尾よく行うためには、焦点の絞られた批判的な分析視座へしっかりと立ち戻ることが不可欠であるように思える。社会分析においてすべての権力サイト、すべての闘争形態を参照したり、すべての周縁の声を取り入れることが不可能であるなら、われわれはもっと穏当な参入点を選ばなければならない。それらの参入点はわれわれ自身の伝記および社会的地理的位置に特有の緊張、不平、確信、好奇心から選ばれるのが通常である。わたしのいわんとするところは結局、ふたつの条件が満たされさえすれば、階級、ジェンダー、人種、性的選好のいずれかに大きな焦点を絞って書いても大して問題ではない、ということである。第一に、批判的社会分析家は彼らの研究の質が社会的位置に影響されることを認識し、承認すべきである。第二に、批判的分析家は、社会学からみた他の権力次元を考慮することで、彼らの選んだ社会的分析への参入点が非常に強化されることを

考慮すべきである。

以上の指針にわたしが従っていたなら、階級、スポーツおよび社会発展はずっとよい本になっていたであろう。わたしは常に信じてきたのだが、歴史的語りは一定の信憑性テストに従って保持されることができる。しかしながらわたしはまた、歴史的“事実”の客観的で十全な説明としてよりも、構成された説明、つまり一定の観点から叙述された歴史についての政治がらみの偏った“読み”として、文献を位置づける必要を理解してはいた。にもかかわらず、社会のうえに立ち、特権の外部に距離を置いて立った専門家の確信、権威をもって、つまりわたし自身の警告をも崩壊すところのある言説スタイルで、わたしはこの本を書いた。同時に、男性らしさ、内的植民地主義、明示的暗示的人種主義、人種のナショナリズムといった事柄と階級のあいだの相互構成的関係をわたしが探求していたなら、階級とスポーツに関するわたしの議論は実のところもっと強力なものになっていただろう。

よりよい歴史、より包括的な理論を書くためには全体性よりも^{コンプレキシティ}複合性が求められる。異なった社会もしくはグローバルな社会関係におけるスポーツの性質の変化について語るストーリーはどれでも、部分的である他ないが、しかしそれらのストーリーはいつでも一層複合的に作成される。複合性を増すひとつの方法は、単一の参入点（例えば階級、ジェンダー、もしくは人種）のうえに立ち、前述したわたしの注釈の方向にそって広範囲の沈黙、構造的実践、権力中心を追求することである。複合性増加のもうひとつの方法は、歴史が不均等に経験され、矛盾で貫かれる道筋、人間行為の意図せざる結果に留意することである。わたしの見解では不均等性という争点は、非常に多くの理論家や調査者がそれに理解が足りないようであるので、特に重要である。このことが特にあてはまるのは、ポスト・モダニズム、ポスト産業主義、またはポスト・フォーディズムといった用語がスポーツを記述するために安易に振り回されるときである。それらの用語は全領域のスポーツの実践のもつ諸特性を構造化するためにでてきた、全く新しい社会的文化的ダイナミクスのある種の組み合わせを示すものとされる。

わたしはこれらの記述的諸カテゴリーは価値がないと言っているのではない。問題はときにそれらが用いられる物象化的全体化的方法にある。そのような場合には社会発展の複合性や不均等性がよく見失われる。例えばポスト・モダンのスポーツは言うまでもなく、“ポスト・モダンの”社会条件のような事態が存在したとしても、それを確実に経験できるのは一定の文脈にいる一定の人々の集団だけである。どのようなひとびとが（ここでは圧倒的にインテリが思い浮かぶが）、どのような文脈で“ポスト・モダンの条件”を経験するのかという評価は、社会学に深く関わる問題としてわたしをとらえる。つまるところ、多様で不均等的な変動経路が理解できる理論内包的歴史、一定の時点でのスポーツ的实践領域の構造化原理が支配的、残存的、創発的諸傾向の複雑な組み合わせを含んでいると認識される歴史を書くことが今後の課題である。

注

- 1) *Silencing the Past: Power and the Production of History* (Boston: Beacon Press, 1995), p.xix.
- 2) これらのアイデアはギデنزの以下の著書で初めて導入された。*New Rules of Sociological Method* (New York: Basic books, 1976); *Studies in Social and Political Theory* (Berkeley: University of California Press, 1979) および *Central Problems in Social Theory* (Berkeley: University of California Press, 1979). 構造化の理論はギデنزの後の著書 *The Constitution of Society* (Cambridge: Polity Press, 1984) でさらに練りあげられた。
- 3) Lukesの著書 *Essays in Social Theory*, (New York: Columbia University Press, 1977) における“権力と構造”に関する巻頭論文が特に有益である、とわたしは思う。
- 4) 例えば、*The Constitution of Society*, pp.68-73. における Goffman や“言說的”認識と“実践的”認識のあいだの交差に関するギデنزの議論をみよ。
- 5) これらの概念の Williams の取り扱いについてのわたしの理解は *Marxism and Literature* (Oxford: Oxford University Press, 1977) に特に負っていた。
- 6) Clifford Geertz, “Deep Play: Notes on the Balinese Cockfight”, *Daedalus* Winter, 1972.
- 7) 1970年代末期, 1980年代初期の文化研究の“グラムシ的”転換についての有益な概観は, *Popular Culture and Social Relations*, eds. Tiny Bennett, Colin Mercer and Janett Woollacott (Milton Keynes: Open University Press, 1986) でみられる。さらなる概観はわたしの論文“Notes on Popular Culture and Political Practice” in *Popular Culture and Political Practices*, ed. Richard Gruneau (Toronto: Garamond Press, 1988) でみられる。現代の文化研究におけるグラムシの利用についての啓発的で批判的評価は David Harris, *From Class Struggle to the Politics of Pleasure* (London: Routledge, 1992). にみられる。カナダの政治経済学的伝統に関する有益な歴史が, *The New Canadian Political Economy*, eds. Wallace Clement and Glen Williams (Montreal: McGill Queen's University Press, 1989) および *Understanding Canada: Building on the New Canadian Political Economy* (Montreal: McGill-Queen's University Press, 1997) にみられる。
- 8) 例えば *Outline of a Theory of Practice* (Cambridge : Cambridge University Press, 1977, originally published in 1972) における Bourdieu の社会的実践や“ハビトゥス”に関する議論をみよ。社会的実践としてのスポーツにおける“ルール”に関するわたしの議論は、会話行為に関する John Searle の議論、構造化に関する Giddens の議論、社会的再生産に関する Bourdieu の議論に由来する幾つかのアイデアを総合化する試みから出てきた。しかしわたしは、ルールは身体化された実践に他ならないという Bourdieu の基底の洞察に十分な注意を払わなかった。ルールを身体化された実践とする有益な議論が Charles Taylor, “To Follow a Rule...” in *Bourdieu: Critical Perspectives*, eds. Craig Calhoun, Edward LiPuma and Moishe Postone (Chicago: University of Chicago Press, 1993), pp.45-60. にみられる。
- 9) この点は Richard Gruneau, “The Critique of Sport in Modernity: Theorizing Power, Culture, and the Politics of the Body” in *The Sports Process; A Comparative and Developmental Approach*, eds. Eric Dunning, Joseph Maguire, and Robert Pearton (Champaign, IL: Human Kinetics Press, 1993), pp.85-109. においてさらに展開されている。
- 10) Jacques Derrida, *Specters of Marx: the State of the Debt, the Work of the Mourning, and the New International* (London: Routledge, 1994.)
- 11) 含まれるのは例えば: Richard Gruneau, David Whitson, and Hart Cantelon, “Methods and Media: Studying the Sports/Television Discourse”, *Loisir et Société* 11, 12, (1988), pp.265-279; Hart Cantelon and Richard Gruneau, “The Production of Sport for Television” in *Not Just a Game*, eds. Jean Harvey and Hart Cantelon (Ottawa, University of Ottawa Press, 1988), pp.177-193 および Richard Gruneau, “Making Spectacle: A Case Study in Television Sports Production” in *Media, Sports and Society*, ed. Larr Wenner (Newbury Park, CA :Sage, 1989), pp.134-154.
- 12) それらのテーマの幾つかは Richard Gruneau and David Whitson, *Hockey Night in Canada ; Sport, Identities, and Cultural Politics* (Toronto: Garamond Press, 1993). で探求された。
- 13) これらの過程に関する有益な要約, および異なった説明は, David Harvey, *The Condition of Postmodernity* (Cambridge: Basic Blackwell, 1989) ; *Post-Fordism*, ed. Ash Amin (Oxford :Blackwell, 1994) および

- Manuel Castells, *The Information Age: Economy, Society and Culture*. Vol. 1. *The Rise of the Network Society*, (Oxford :Blackwell, 1997) にみられる。
- 14) Castells, *The Information Age* Vol. 2. *The Power of Identity* (Oxford: Blackwell, 1997) および *Culture, Globalization and the World-System*, ed. A.D.King (London:Macmillan, 1991). における諸論文をみよ。
 - 15) この点に関わる広い範囲にわたる争点^が, David Rowe and Geoffrey Lawrence, "Beyond National Sport: Sociology, History and Postmodernity", *Sporting Tradition* 12, 2 (May, 1996), pp.3-16; B. Houlihan, "Homogenization, Americanization, and Creolization of Sport: Varieties of Globalization", *Sociology of Sport Journal*, 11(1994), pp.356-375; J.Maguire, "Sport, Identity Politics and Globalization :Diminishing Contrasts and Increasing Varieties", *Sociology of Sport Journal*, 11 (1994), pp.398-427 および Gruneau and Whitson, *Hockey Night in Canada*, Chapters 9-12, pp.199-283. で議論されている。
 - 16) Elias による数点の研究例として, *The Civilizing Process* (Oxford:Blackwell, 1978: 2vols.; originally published in 1939); *The Civilizing Process*, Vol. 2: *State Formation and Civilization*(Oxford: Blackwell, 1982); *What is Sociology* (London:Hutchinson, 1978) および *Involvement and Detachment* (Oxford: Blackwell, 1987). をみよ。Elias のスポーツ社会学への貢献は Norbert Elias and Eric Dunning, *Quest for Excitement* (Oxford Blackwell,1986) において明らかである。
 - 17) Joseph Maguire, "Sport, Identity Politics and Globalization", *Sociology of Sport Journal*, 11 (1994) および "Globalization and Sportization: A Figurational Process/Sociological Perspective", *Avante*, 4, No.1, (1998), pp.67-89.
 - 18) Eric Dunning "Industrialization and the Incipient Modernization of Fooball," *Stadion*, 1, 1 (1976); Eric Dunning and Kenneth Sheard, *Barbarians, Gentlemen and Players* (London : Martin Robertson, 1979).
 - 19) 例えば, Michel Foucault, *The Order of Things* (London : Tavistock, 1970); *The Archaeology of Knowledge* (London:Tavistock, 1974); *Discipline and Punish: The Birth of the Prison* (New york: Vintage Books, 1977); *Power/Knowledge: Selected Interviews and Other Writings, 1972-1977* (Brighton: Harvester Press, 1980) および *The History of Sexuality* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1981). Foucault の研究のスポーツ社会学にかかわらせた有益な考察は Jean Harvey and Robert Sparks, "The Politics of the Body in the Context of Modernity" *Quest*, 43(1989), pp.164-189; Cheryl Cole, "Resisting the Canon: Feminist Cultural Studies, Sport, and Technologies of the Body", *Journal of Sport and Social Issues*, 17, No.2 (August, 1993) および David Andrews, "Desperately Seeking Michel: Foucault's Genealogy, the Body and Critical Sport Sociology", *Sociology of Sport Journal*, 10 (1995). pp.148-167. にみられる。
 - 20) Robert Connell, "Why is Classical Theory Classical?" , *American Journal of Sociology*, Vol.102, 6(1997), p.1512.
 - 21) Connell, "Why is Classical Theory Classical?" , p.1511.
 - 22) Connell, "Why is Classical Theory Classical?" , p.1535.
 - 23) Connell, "Why is Classical Theory Classical?" , p.1546.
 - 24) 北米の文献をみると, Susan Birre と Cheryl Cole が, 1980年代末期, 1990年代初期におけるジェンダーと人種のあいだの交差への関心を深め始めた。Susan Birrell, "Race Relations in Sport : Suggestions for a More Critical Analysis", *Sociology of Sport Journal*, 6 (1989), pp.212-227 および "Women of Color, Critical Autobiography and Sport" in *Sport, Men and the Gender Order: Critical Feminist Perspectives*, ed. M.A.Messner and D.Sabo (Champaign, IL : Human Kinetics Publishers, 1990), pp.185-189. および Cheryl Cole and H.Denny, "Visualizing Deviance in Post-Regan America: Magic Johnson, Aids, and the Promiscuous World of Professional Sport", *Critical Sociology*, 20(1995), pp.123-147.
 - 25) 例えば, John Bale and Joe Sang, *Kenyan Running: Movement Culture, Geography, and Global Change* (London: Frank Cass, 1996). をみよ。
 - 26) 例えば, J.A.Mangan, "Duty Unto Death: English Masculinity and Militarism in the Age of the New Imperialism", *The International Journal of the History of Sport*, 12, no.2, (1995), pp.10-38; Richard Holt, "Constrasting Nationalisms: Sport, Militarism, and the Unitary State in Britain and France

- before 1914", *The International Journal of the History of Sport*, 12, No.2(1995), pp.39-54.
- 27) 学生達が自分達の選択に関してあげた理由は、NBAのような一流の合衆国スポーツの魅力から、“人種とスポーツ”の他の次元に関する研究論文が比較的欠けていることまで、さまざまであった。(スポーツにおけるアジアの競技者、アジア的アイデンティティに関する資料の欠落にたいする不平はよく耳にした)
 - 28) Manuel Castells, *The Information Age: Economy, Society and Culture. Vol.2. The Power of Identity* (Oxford: Blackwell, 1997), p.199.
 - 29) Nancy Fraser, *Unruly Practices: Power, Gender and Discourse in Contemporary Social Theory* (Minneapolis : University of Minnesota Press, 1989), p.4.
 - 30) Bianca Beccali, “The Modern Women's Movement in Italy”, *New Left Review*, 204, March/April (1994), p.86.